

キャリア教育とケアの倫理 —「生き方教育」としてのキャリア教育の探求—

前田 信彦ⁱ

従来のキャリア教育は、就職活動の成功や職業達成を念頭に、職業適正や自己分析、あるいは就職に必要なスキルの獲得のためのプログラムが組まれてきた。「社会人基礎力」に象徴的なように、職業観やスキル習得のみを念頭に置いた従来型のキャリア教育には「どう善く生きるのか」といった哲学的洞察の要素は含まれない。今後のキャリア教育で求められるのは、職業選択や企業とのマッチングへの相談業務のみならず、学生自身の「生き方」の模索を支援することにあると言えるだろう。本稿では大規模大学での授業で実施したアンケート調査に基づき、現代の大学生の自己省察の習慣行動や「ケアの倫理」が、社会的公正への行動、あるいは社会正義志向に及ぼす影響について探索的な分析を行い、「生き方教育」を内包したキャリア教育の新たな方向性を探る。

キーワード：キャリア教育、ケアリング、ケアの倫理、高等教育

1 はじめに

キャリア教育が本格的に高等教育に導入されて久しい。その成果も実証的に明らかになりつつある一方、仕事に必要な汎用的スキルのみならず、公共的関心や社会的正義の実現といった新たな方向性が模索されている。さらに、若者の宗教や倫理（エシックス）、あるいは精神性（スピリチュアリティ）¹⁾といった人間の内面性に関わる要素が、職業選択やキャリア形成と密接にかかわってくることから、近年、仕事の倫理、ケアの倫理などを含めた学生に内面性の成長への支援を取り込んだ教育の重要性が指摘されている（ネル・ノディングス、2007=1992）。

筆者の関心は、これまでのような労働市場を念頭においた職業準備教育のみを目的としたキャリア教

育を批判的に捉えつつ、「社会正義・社会的公正」あるいは「生き方の探求」「ケアの倫理やスピリチュアルな成長」といった大学生が直面する人生への問いかけに、学生自らがその問題に向き合い、一定の方向性を考える機会を提供するキャリア教育プログラムの可能性を探ることにある²⁾。

しかし、こういったキャリア教育の新たな展開において、社会的公正・社会正義、あるいはケアの倫理・精神性（スピリチュアリティ）といった要素を具体的にどのように取り込んでよいのかについては、ほとんど研究が進んでいない。果たして共生社会に向かう「ケアの倫理」や「社会正義への志向」を、職業準備教育としてのキャリア教育の中でどのように展開していったらよいだろうか？ このような課題については、従来のキャリア教育の現場のみならず、学術的にもほとんど議論されていないのが現状であろう。

この問題を理解する上での一つの手がかりは、

i 立命館大学産業社会学部教授

2015年に行われた国際キャリア教育学会での基調講演である(労働政策研究・研修機構, 2016)。そこでは3名のキャリアガイダンスやキャリア教育に造詣の深い研究者が基調講演を行っているが、講演録でもわかるように、学生やクライアントの「生き方やスピリチュアリティ」、「公共性や社会正義とどう向き合うか」といった新たな論点が提示されている。ここでは職業準備やビジネス(仕事)のために行われてきたキャリアガイダンスやキャリア教育を反省的に踏まえながら、グローバルな社会における「社会正義的志向を持ったキャリアガイダンス・キャリア教育」(ナンシー・アーサー, 2016)あるいは「学生やクライアントのスピリチュアルな成長」(ブライアン・ディック, 2016)といった要素を取り入れたオルタナティブなキャリア教育の方向性が提案されている³⁾。実際、この講演録を解説した下村(2016)も、「キャリアガイダンスの諸活動が社会的公正の実現に役立つという議論が、様々な文献で展開されている」(下村, 2016:25頁)と述べ、従来の労働市場と求職者のマッチングを目的とした「就職ガイダンス」という領域を超えて、社会正義を意識した質の高いキャリア支援を行うことが極めて重要であると指摘している。このような近年のオルタナティブなキャリア教育・キャリア支援の動向を踏まえると、今後のキャリア教育の展開について議論するにあたっては、さしあたり次の二つが主要な論点となるだろう。

第一の論点は、従来のキャリア支援や教育においては、生涯キャリアを視野に入れた社会的公正や社会正義への関わりについて学習するカリキュラムが十分ではないという点である。現行のキャリア教育の多くは学生と企業との間のマッチングに焦点が当てられており、職業適性を確認しながらいかに就職に結びつけるかが主要な目的となっている。そこでは、労働市場における就業(就職活動)が大きな目標であり、広く「市民としてどうキャリアを形成するか」「仕事や職業キャリアを通して、公共善への貢献をどう実現していくのか」といった論点は希薄で

ある。キャリア教育とシチズンシップ教育の接合に関する議論が実践レベルでも、研究レベルでも十分とは言えない。

第二に、キャリア形成において、経済的安定、地位、収入、名誉といった経済的、物質的な要素だけでなく、仕事の倫理、あるいは他者への配慮(ケアリング)などキャリアにおける学生の内的な充実をどう育むのかについては、カリキュラム上どう位置付けるのかについては十分に議論されていない点である(ネル・ノディングス, 2007=1992)。これはキャリア教育と倫理教育・スピリチュアリティ教育との接合に関する論点となる。そもそも、キャリア支援やキャリア教育には、「いかに良い会社に入るか」、「どうやって収入を上げるのか」、「いかに効率よく仕事を上手にこなすのか」といった点のみならず、「他者への気づきや支え合い(ケアリング) = Noddings, N, 1992:15-27(邦訳42-64頁)を含めた人間的な内的成長への教育・充実の支援がその根幹にあることを再度確認する必要があるだろう。もっとも、日本ではスピリチュアリティという、(とりわけオウム真理教事件以降)カルト集団を想起させることもあり、大学等の高等教育のキャリア教育の場面では十分に議論されてこなかったと言える。しかし、職業準備教育のみならず、職業生涯の中でも社会的公正や公共への貢献を視野に入れたキャリア教育の中に、内省的な知(reflective knowledge)、あるいはケアの倫理(caring)、精神性(spirituality)の涵養を積極的に位置づけることが必要ではないだろうか。

第一の点は別稿(前田, 2020)で論じたので、本稿では第二の点、すなわち大学生の精神性(spirituality)の中でも、特に「ケアの倫理(caring)」に関する分析を行う。教育を通じた自己省察の習慣やケア倫理の発達、社会正義の志向性にどのような効果を持つかを実証的に分析することを通して、新たなキャリア教育の方向性を探ることが本稿の目的である。

2 先行研究

2-1 キャリア教育の原点

キャリア教育に「他者への配慮やケアの倫理」あるいは、スピリチュアリティの要素をどう取り込むかについて考えるにあたっては、さしあたりキャリア発達とキャリアカウンセリング研究の先駆者であるサニー・ハンセン（Sunny Hansen）の業績を確認しておく必要があるだろう（Hansen, 2001, 渡辺, 2007）。キャリア支援やキャリアガイダンスの専門家である心理学者のハンセンは、統合的生涯設計（ILP = Integrative Life Planning）という概念を用いて、生命（身体・心、精神＝霊性）、生活役割（愛、学習、労働、余暇、市民生活）、文化、ジェンダー、コミュニティといった複数の生活側面を視野に入れたキャリア発達論を提起する⁴⁾。特に統合的生涯設計（ILP）を目的とするキャリアカウンセリングの課題の一つは、人生の究極的な（生きることの）意味（ultimate meaning in life）に関わるものであり、人生の「目的（purpose）」や「意味（meaning）」とスピリチュアリティとをつなげていくことにあるという（Hansen, 2001:268頁）。スピリチュアルな成長も含んだキャリア支援という視点に立って、（学生を含む）クライアントに対して、どのようにスピリチュアリティのある生き方を提案すべきかについても提示している。もっとも、そういったスピリチュアリティの提案を学校教育で紹介していくことには、「宗教」と混同する危険性もあると述べる（Hansen, 2001:271頁）。しかしながら、社会がより科学技術に依存し自律的な生活が可能になる一方で、一人ひとりが孤立化しやすい現代社会においては、生きることの意味や、人々とつながることへの希求はより重要になるだろうとハンセンは述べ、スピリチュアリティを涵養するキャリアカウンセリングの実践を説く。さらにハンセンのキャリア論においては、人生の意味と内的成長だけでなく、民主的価値観や社会正義の実現に向けたキャリア支援が強調される

（渡辺, 2007:167頁）。キャリア発達支援の重要な課題の一つとして、人生の目的、意味を探求すると同時に、一人ひとりが自分自身の人生の意味を理解しながらも、より大きな社会、コミュニティにどう貢献するかといったマクロな課題に向き合うことが必要であると主張するのである。「キャリア」を「仕事＝職業キャリア」と限定するのではなく、精神性や社会正義を内包した「ライフ＝生活キャリア」としてホリスティックに捉えていこうとするのがハンセンのキャリア発達論の主眼である。こうしてみると、キャリア発達を支援する上では「社会正義」や「ケアの倫理」あるいは「スピリチュアリティ」といった要素は中心的に位置づけられるものであり、職業上のマッチング手法だけがキャリア支援・キャリア教育の目的ではないといえよう。

ハンセンのキャリア論を待つまでもなく、これからのキャリア教育においては職業準備教育としての機能のみならず、職業生活を豊かにするためのケアの思想（支え合いのエシックス）、あるいはスピリチュアリティの涵養を含んだライフ教育の視点が欠かせない⁵⁾。実際、日本キャリア教育学会（2008）は、ハンセンの「統合的生涯設計」と同様、「職業教育としてのキャリア教育」という狭義の定義を超えて「ライフキャリア」という概念を積極的に打ち出している。しかし、ライフキャリア教育に関してはわが国では実証的研究がきわめて少ないのが現状である（前田, 2020）。

2-2 カリフォルニア大学（HERI）の全米調査

一方、海外ではすでに他者の配慮・ケアを含めた「スピリチュアリティ」が大学生の学習成果に大きく貢献することが実証的に明らかにされている。多少長くなるが、以下、その代表的な調査研究である、カリフォルニア大学（UCLA）の高等教育研究所（Higher Education Research Institute, 以下 HERI）で実施された大学生のスピリチュアリティ調査を概観してみよう。この全米で実施された大規模プロジェクトは、大学生の（若者の）間にある普遍的な「精

神性」の成長過程を実証データから検証している点で本稿の分析においても参考になる。

2003年から2010年の7年に渡ってHERIで実施された大学生のスピリチュアリティに関する大規模調査では、伝統的な制度的宗教ではなく、精神的豊かさとしてのスピリチュアリティが大学生の学習意欲を高めると同時に、グローバル社会への関心や異文化への理解度(グローバル・ケアの倫理)を深めることを大規模アンケートにより検証している(Astin, et, al, 2010)。2003年にHERIで開始されたこのプロジェクトでは、全米の公立、私立、大学規模、宗教系、非宗教系を問わず136の大学が選ばれ、新入生から3回生までの在校生から回答を得て、最終的に14527名規模のデータを得ている。2004年から2007年の間に新入生(1回生)から3回生までの追跡調査も実施され、縦断的データを用いて米国の大学生のスピリチュアリティと学生生活への影響を客観的かつ精緻に分析している点でも、得られた知見の信頼性は高いといえるだろう。HERIによる大学生のスピリチュアル調査の背景にはいくつかの米国の教育環境の変化があるとAstinは指摘する。それは、大学生の新入生調査でみる意識の変化にみられるという(Astin, et, al, 2010: 3-8頁)。要約すると以下のようなものである。

第一に2000年以降、大学生の意識調査のトレンドを見ると、学生の個人的な目標として「経済的成功」が最も高い項目として挙げられ、これに対して1970年代に最も高い割合であった「有意義な人生哲学の発達」は急激に落ち込んでいる。つまり若者の間で精神的な(内的な)充実よりも経済的価値が強く意識されてきたという傾向がある。

第二に、大学生の多くが、将来への大きな不安を抱いている点である。学費を賄えるのか、大学卒業後に仕事に就けるのかといった経済的不安と同時に、経済状況の悪化、自然環境の破壊(地球温暖化)、様々な宗教間への対立や政治対立が流血の事態をもたらしている現実によって、そういった大学生の不安がもっとも増幅しているという。これによって、実際は

大学生は、社会の変化が著しい中での内的な安定性を求めているという現実がある

第三に、高等教育で重視されてきた、認知的(cognitive)な発達 思考、根拠づけ、記憶、批判的分析能力など、従来から重視されてきた学力の評価基準が大学生の成長を測定する上では限界があり、これに加えて「非認知能力(non-cognitive competencies)」などの学習能力の発達あるいは情緒的な側面が学業成績に及ぼすことについても関心をもたれ始めている。

第四に、グローバル社会への関心の高まりである。地球規模で起こる暴力、貧困、民族対立の中で、テクニカルな知識やスキルだけでは十分ではなく、根本的にはグローバル社会への理解あるいはグローバルケアへ貢献する精神性(スピリチュアリティ)の発達が大学教育に求められているという。自己への気づき、自己理解、Equanimity(大きなものに委ねていく冷静さ)、共感、他者への関心といったことが要求されている中で、就職や経済的成功以外の内的な成長がとりわけ重要となってきている。

要するに、HERIが大規模プロジェクトで大学生のスピリチュアリティを調査した背景には、それまでの大学生の成長を測る軸そのものが、いわゆるテストスコア、成績、単位(credit)、学位といった認知能力のみに評価基準が偏っており、内的な成長(inner development)にはほとんど関心をもたれなかったことへの批判がある(Astin, et, al, 2010: 7頁)。つまり、大学の学びを通して、学生自身が価値観の変容、信念、情緒的な成熟、モラルの発達、スピリチュアリティ、自己理解といった点が、どのように変化しているのか、そして大学教育はそういった大学生の精神性・霊性の成長にどの程度寄与しているのかといった側面を学術的に明らかにしようという大きな目標があったのである(Astin, et, al, 2010: 2頁)。こういった問題関心から大学生のスピリチュアリティのプロジェクトがUCLAの高等教育研究所(HERI)を拠点に進められ、7年にわたる継続調査が実施された。

この研究結果の中でも、最も衝撃的な結果の一つは、Equanimity（スピリチュアルな態度）にみられる精神性＝霊性の成長が学業成績（GPA）の改善に効果の見られたことである（Astin, et. al, 2010:119頁）。Equanimityとは辞書的には「冷静さ」「平静」であるが、もともとは「(人間を超えた超越的な存在に)委ねる」という意味合いがあり、スピリチュアリティの主要な指標の一つである。実際、HERIによる分析ではスピリチュアリティの中でも、教育のアウトカムに対して最も効果の高かった変数は、Equanimityであった⁶⁾。大学の成績評価を表すGPAをみると、学年が上がるに従ってEquanimityのスコアが上昇した学生は、その後GPAの評価値も改善する傾向が見られた。また、Equanimityは、学生の知的な自尊感情にプラスの効果を与えていたことも判明した。例えば、Equanimityも自尊感情も大学入学時点では中程度であった学生の成長経過をみると、Equanimityの値が在学中に上昇した学生の場合、減少した学生に比べて最終学年までに3倍の高い自尊感情のスコアを示していた(9%対27%)。(Astin, et. al, 2010:120頁)。つまりEquanimityは自尊感情にも有意な効果を持っているのであり、このことは、真理への探究を促すようなアクティブマインドを大学生にもたすためではないかとHERIのレポートは推測している（Astin, et. al, 2010:120頁）。また大学生生活の満足度を見ても、Equanimityのスコアが低下した学生は「学生生活が満足」と答えた学生が20%であったのに対して、Equanimity変化なしの場合の学生生活満足度は約40%、Equanimityスコアが上昇した学生の満足度スコアは60%以上まで上昇するという結果であった。さらに、グローバルシチズンシップの意識の項目である「異なった民族や文化を持った人々と暮らしていく能力」に対しても同様の結果であった。Equanimityスコアが在学中に上昇すると、グローバルな共生意識は有意に高まる傾向が見いだされたのである（同:126頁）。Equanimityの高い学生は、将来の生活に対して肯定的な見通しを持っているという感覚から、他者に対

しても寛容であり、共感や関心、結びつきなどが高まるのだらうとAstinは述べている（同:126頁）

Astin, et. al (2010)においては、精神性（スピリチュアリティ）に関連する諸変数が、社会的行動に対してどのような影響を与えていたかについては分析されていないが、「異なる民族や文化と共に暮らしていく」という態度に対して有意な効果を持つことが明らかにされており、グローバルな社会での他者理解に対してはスピリチュアリティ教育が重要であると結論づけている（Astin, et. al, 2010:135頁）。このようにEquanimityというスピリチュアリティの一部をとってみても、大学生の内的・精神的な成長が学業成績や公共的関心の高まりにまで大きく影響するという事実発見は、高等教育の学習過程でもスピリチュアリティの成長が重要な要素となることを提起しているものといえよう。HERIの調査研究結果をみても、大学生のスピリチュアリティの成長は、彼ら／彼女らの内的な充実や学生生活の満足度を高めるだけでなく、グローバルな社会正義志向や他者への理解とケアの実践といった、自己を超えたマクロな社会への関心を高めることが、あらためて確認できるのである⁷⁾。

一方、HERIの調査では上記に加えて、大学生の精神的豊かさを測る指標としての「ケアの倫理(caring for and about others)」の重要性も指摘されている。米国の教育学者であるネル・ノディングスの研究(Nel, Noddings, 1992)を引用しながらAstinらは次のように述べる⁸⁾。「他者を気遣うこと(caring about)は、正義の感性(sense of justice)の土台となるものであり、そして次に、それは実際に「他者をケアすること(caring for others)」へとつながっていくものである」。Astinらは「精神性(spirituality)の中でもとりわけ「他者への気づき」が重要である点に触れ、高等教育においても「ケアの倫理(caring for and about others)」を養うことの重要性を繰り返し指摘する（Astin, et. al, 2010:65頁）。

実際、Astinらはこのような「ケアの倫理」をス

スピリチュアリティ (魂=精神性) の主要な指標として位置づけ、大学生へのアンケートにおいては8項目の質問を用いて測定を試みている。分析結果では、そのような「ケアの倫理」が、社会正義に関わる諸問題への関心や、(自分自身の住む) コミュニティの福祉への関心を高め、さらに、政治的活動への関与の欲求の基盤となる (Astin, et. al, 2010, 64頁) ことを見出している。Astinら (2010) のタイトルの原文は「Cultivating the spirit」であり、日本語では「魂を養う」とでもなるだろうが、いずれにしても、宗教的な精神性を超えた広義の精神的な豊かさ (spirituality) を大学教育で教えていくことの重要性を指摘する。「Equanimity」や「ケアの倫理」といった、既存の宗教を超えた広義の精神性 (spirituality) は、知識の伝授とともに、高等教育の重要な要素なのである。

3 キャリア教育における「ケアの倫理」

これまで述べてきたように、キャリア教育と社会正義を考察するにあたって重要な点は、就職準備だけでなくキャリア教育の目的は何か、そしてそれは学習者のどんな内的な動機によって支えられるか、という点である (前田, 2020)。実際、教育学者であるネル・ノディングス (1992=邦訳2007) はその著『学校におけるケアの挑戦』の中で、「現代の公立学校において最も欠落しているのはスピリチュアリティであろう」 ((邦訳157頁=原文81頁) と述べ、学校教育におけるケアリングという倫理を基本とする精神性 (スピリチュアリティ) の重要性を指摘している。ネル・ノディングスの用いる中心的概念である「ケアリング (caring)」とは、すなわち「ケアする者 (あるいは「ケアの提供者」) の意識状態を、専心 (engrossment) 及び動機づけの転移 (nonselective receptivity) すること」 (翻訳, 2007:43頁) であり、「専心」とは、「ケアされるものへの開放的で、選り好みすることのない受け入れ」を意味する (同上: 43頁)。ここでネル・ノディングスの提起する「専心

(engrossment)」はやや分かりにくい言葉であるが、その文脈から解釈すると「ケアへの返礼として、どんなものが見返りとしてくるかは関係なく (nonselective receptivity), その見返りを素直に受け止める寛容さ」とでも翻訳が可能であろう。ノディングスの用いる「ケアリング」は、与えたことへの見返りを期待するかしないかは別として、「他者への配慮 (シモースヴェイユの言う「注意深さ」ともノディングスは述べる) が構築する他者との関係性を重視することでもある⁹⁾。このノディングスのケアリング論で最も特徴的なことは、学校教育に取り入れるべき「ケアリング」を、「身近な他者」に限定していない点であろう。その著『学校におけるケアの挑戦 (1992)』において例示されるケアリングは、「自己へのケア」、「身近は人たちへのケア」、「遠く離れた見知らぬ人たちへのケア」、「動物や植物など自然環境へのケア」、「人工物の世界へのケア」そして「理念へのケア」と多岐にわたる。つまり、ノディングスのいう「ケアリング」は、自分自身と、それを取り巻く人間関係や社会関係のみならず、それらを超えた事象を含んだ「他者へのケア」と位置付ける点にあり、このケアリングを学校教育の中で伝えることが重要だという。曰く「教育は、伝統的な学問分野 (discipline) に基づいてではなく、ケアのテーマに基づいて組織されるべきだと私は論じてきた。すべての生徒が従事すべきなのは、自己、親しい他者、遠方の他者、植物、動物、環境、人工の世界、そして理念、などをケアするようにと導くような一般教育である」 (邦訳 2007: 310頁)。

一方、我が国においては社会学者の今田高俊が上記のネル・ノディングス (1984=1997) の研究にも触発されながら、教育という場を超えた社会システムの中に「ケアの倫理」の概念を積極的に取り込みつつ、ケアの倫理という哲学的問いを、他者との共生を基礎にした福祉国家 (共生社会) の原点となることを社会学という学問領域の中で定式化する (今田, 2001, 2004, 2017)。今田によれば、近代の自我は自由で自律した主体的個人を想定する。しかし、

「こうした自我観においては、人間が周りへの関心と生きる意味に左右されつつ他者と交わる存在であることが見失われてしまう」（今田、2017：38頁）。そのため、「自己の存在確認を得て、自分自身であるためにもケアする他者が必要である」と述べる（今田、同上）。そのうえで、今田は精神分析家のエリク・エリクソンを引用しながら、「他者をケアする」ことの意義を社会学の視点から述べる。ケアとは単なる他人への気配りではなく、自己の心の葛藤を克服する力であり、「愛や、必然や偶然によって生み出されてきたものへの、広がっていく関心であり、それは不可逆的な義務に付着した心の葛藤を克服する力」（今田、同上）と定義する。近代を超えた価値と、共生社会の条件として「ケアの倫理」が最も重要な要素の一つと位置付けるのである。これは社会学のテーマとする社会秩序への問いへの応答でもある。すなわち、ケアを介したつながりは人間関係の基礎となるものであり、社会秩序の基本原理に関わるものであるからである。「ケアの発想を欠いた社会は、人間関係を貧しくし、殺伐とした弱肉強食の社会を帰結する。ケアという考え方に含まれる他者との共生を基礎にした福祉国家が不可欠である」と述べ、最終的には「ケアの倫理」を基盤とした共生社会の鳥瞰図を描いている（今田、2004：254頁）。

以上のネル・ノディングスあるいは今田高俊の研究を踏まえると、キャリア教育にとっての精神性（スピリチュアリティ）、あるいは人間の内的成長の一端を、「ケアの倫理」として捉えることが可能であろう。とりわけキャリア教育の中に社会正義への志向性を取り入れる際には、職業準備教育としての汎用的スキルや知識の獲得に加えて、「他者へのケア」というケア倫理の要素は極めて重要であると考えられる。

しかし一方で、ノディングスや今田の言う「他者をケアする」というケアの倫理の要素には、もう一つ別の側面があるのではないかと筆者は考える。それは「ケアされている」という点である。例えば、ノディングスのいう「ケアリング」は、自己から幅広い対象への「専心」（注意深く配慮すること）が行為

の出発点となる。しかしそれは、あくまでも「自己」から「他者」への「働きかけ」が、行為の原点である。例えば植物などの自然環境に配慮するという行為は、あくまでも自己から自然という「他者」への働きかけであり、それによって自己は自然という他者からの「選り好みのしない（nonselective）な見返り」があるとする。しかし、人間存在は（とりわけ東洋に位置する我が国では）他者である自然環境に「働きかける前」に、自己を超越した存在としての自然から「働きかけられている」と考えられるのではないだろうか。自分は何か大きな見えない力によって「生かされている」という実感などは、日本人が普通に持ちうる感性でもある。そこには「他者に働きかける」ケアではなく、すでに、他者から「ケアされている」という感性が前提とされるのである。

筆者は、ノディングスや今田とは異なり、人は（他者から）愛されているという「受容の感性」がないと、他者を愛するという事は難しいと考える。つまり「他者をケアする」という自己から他者への能動的な「働きかけ」ができることを前提としたケアの倫理のみでは、共生社会の十分条件とは言えない。他者、あるいは人間の営みを越えたより大きなものに「支えられている＝ケアされている」という与件によって、「ケアの倫理」は成立するのではないだろうか。いずれにしても「ケアの倫理」は、「他者を大切にすること」という側面と、「他者から大切にされている」という側面の二つがあって成り立つものだろう。

さて、ここで議論を深めるとするならば、では支える＝支えられる「他者」とは誰のことだろうか、という問いかけが出てくる。つまり、ここでの問いの本質は、支えられている自分を支える「他者」とは誰かということ、すなわちケアの倫理の根底にある「他者の存在」についてどう考えるかという点である。

いみじくも今田の引用するエリクソンの言葉は、すでにその答えを内包していると思われる。つまり、「偶然によって生み出されてきたものへの、広がっていく関心（今田、2017：38頁）」（アンダーライン筆者）という表現にみられる「他者」の存在である。

「偶然によって生み出されたもの」が人間の知性や理性を超越した存在によって生起されると仮定すれば、他者とは社会関係や人間＝他人のみではなく、自己と他者を越えた超越的な存在も含まれるのではないだろうか¹⁰⁾。

本稿ではネル・ノディングスの見解と同様に、「ケアの倫理」に、「自然」などを対象とした、より大きな自己超越的な存在を「他者」として位置づけ、これを「自己超越を含んだ他者へのケア・他者から受け取るケア」という意味で「広義の(互酬的な)ケアの倫理」として提起したい。すなわちノディングスと同様、自分を取り囲む人々、あるいは社会関係(資本)だけでなく、それらを超越した存在も「支えてくれる」他者として捉えるのである。「より大きなもの」というのは、自然(nature)、あるいは地球環境といった「自己超越的な他者からのケア・他者へのケア」まで広く含まれるものであり、必ずしも社会関係性や人間関係に限定されるものではない。ケアされる、という意味には、他者からのケアだけでなく、自己を超えた存在への委託(委ねる)という感性も含まれる。つまり、ケアの倫理における他者とは自己を超えた存在を含むということである。以下、本稿の分析では、人々のキャリア教育に必要な要素として、こういった自己超越への存在を含んだ、自己中心性を脱した他者へのケアという意味での「(広義の)ケア倫理」を用いる。

4 データと方法

4-1 用いるデータと分析枠組み

以下の分析では、2018年4月～2020年3月の2年間、A大学の授業で筆者が担当した複数の授業において、学期末に実施したアンケート調査のデータを用いる¹¹⁾。社会科学系学部に在籍する学生で、大規模講義を受講した1回生、これに加えて、小集団授業を受講した2回生から4回生の大学生であり、サンプルの合計数は229名である。

以下の分析では、図1にみるように、ケアの倫理および内省的な行動習慣が、社会正義志向にどのような影響を及ぼすかを検討する。ここではケアの倫理を「他者の普遍的受容」、「自然との調和」、「超越的存在の認識」、「生きる情熱と意味探求」の4つに分けて、従属変数への影響をみる。従属変数は「社会的公正への行動」、「公共的関心」、「社会正義志向」の三つを取り上げる。

4-2 独立変数

独立変数は「ケアの倫理」と「内省的思考の習慣」の二つである。前者の変数、すなわち、自己中心性を脱した「ケアの倫理」という概念を質問紙調査で量的に測定することは難しい。そこで本稿では、1つの試みとして中村(1998)の自己超越性に関する議論と測定方法を援用することにした。中村(1998)は心理学的な観点から幸福の体現された形としての

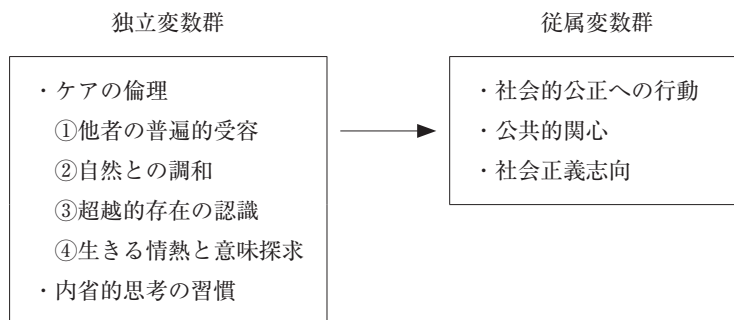


図1 独立変数と従属変数

自己超越（self-transcendence）の概念を取り上げ、これを測定するための尺度構成を試みている。中村の自己超越性の測定においては、他者への配慮、自然との一体感、超越する存在の認識など、上記で提起した幅広い「ケア倫理」に関する項目を含んでいる。そこで、「ケアの倫理」として測定可能な質問のいくつかを試行的に使用し、大学生の「ケアの倫理」とした。

中村の測定尺の構成の理論的背景の一つはトランスパーソナル心理学（transpersonal psychology）である。中村によると、トランスパーソナル心理学は近代的個人の正当な面である科学、理性、批判性は十分に受け継ぎつつ、古代の英知である宗教と霊性を再発見し、近代個人主義が陥るエゴイズムとニヒリズムという限界を超越し、個人主義に代わる人生観、世界観、ライフスタイルを提案する学問であるとしたうえで、「人間の成長を自我の確立、実存の自覚、自己実現などの個人性の段階で終わるのではなく、他者・共同体・人類・生態系・地球・宇宙との一体感・同一性（identity）、すなわち自己超越の段階に到達することができるという命題をもっている」（中村、1998：65頁）。このような理論的枠組みをベースに、中村の尺度構成は二つの手続きを経ている。第一段階は24項目を設定したうえで（STS-1）、主成分分析を行い因子負荷量が.30以下の項目を除去した結果18項目とし、これをSTS-2として「自己超越傾向尺度」としている。心理学をベースとする自己超越尺度とはいえ、近代的個人の幸福追求という個人主義的アプローチを超克し、他者や共同体の集会的な幸福への追求という命題を持っている精神性（スピリチュアリティ）を客観的データから明らかにしている点で、筆者の依拠している社会学的なアプローチにもなり得ると考え、「自己超越的な（広義の）ケアの倫理」を測定する変数として用いることにした。

しかし授業内でのアンケート調査という形式で回答を得る必要からも、時間のコストを踏まえた上で、質問の意図が分かりにくく、大学生がやや回答に躊躇

すると予想された3項目は除去し、最終的には15項目を「ケアの倫理尺度」として採用した。一般に尺度を使用する際には因子分析をするが、ここでは中村の尺度を前提として、因子分析の手法は用いずに文脈的に解釈した上で4つの次元に分けた（appendix1）。なお、内的一貫性の α 係数を測定することにより、尺度の妥当性については確認した。それぞれの変数の内的一貫性は以下の様である（表1）。

表1 ケアの倫理尺度の信頼性係数(Cronbachの α 係数)

	項目数	α 係数
「他者の普遍的受容」	5	.743
「自然との調和」	3	.689
「超越存在の認識」	3	.690
「生きる情熱と意味探求」	4	.747
「ケアの倫理（合計）」	15	.865

ところで、アンケート調査という方法で「ケアの倫理」を問うとしても、その傾向が強いことが、高いケアの倫理性を学生が保有しているとは即断できない点には注意すべきだろう。アンケートで測定されたここでのケアの倫理の尺度は、生きる姿勢や志向性を指していると言ってよいだろう。例えば「他者を普遍的に受容する」というケアの倫理特性の項目が高い得点であったとしても、その人が「他者を普遍的に受け入れることのできる人間だ」とは言えない。むしろ、そのような志向性をもった人間であるということであり、「他者を普遍的に受け入れようとする志向性あるいは姿勢」を持った豊かなケアの倫理をもった人だといえるだろう。同様に、他の次元は「自然と調和性を志向する精神性」「超越的なものを認識する志向性」そして「生きることへの情熱や生きる意味の探求をできる志向性」という意味である。本稿では中村（1998）の尺度を用いながらも、既存の特定宗教や宗教の制度にとらわれない個人の幸福を追求する志向や精神性の変数として使用したい。これを本稿では個人の幸福を超えて、地球市民として人類の幸福を追求しようとする精神性＝ケア

の倫理と呼ぶことにする。

もう一つの独立変数は「内省的思考の習慣」である。「日ごろ、次のような行動や活動をしていますか? それぞれ最もあてはまるものをお選びください」という質問を5つ用意し、その中の一つが「人生の意味や目的を探究すること」という問いであり、「かなりある」～「全くない」までの4段階評価の測定尺度を用いた。この点に関しては加藤(2016)の分析結果を参考とした。加藤は、女子高校生へのアンケート調査の結果をもとに、6～7割の学生が自己省察の習慣を持っており、日記をつける割合も4割に上ることを明らかにしていることから、若者の自己省察はケアの倫理を求める行動の一つとして捉えることができるであろう。「生きる意味」への問いや自分探しへの傾向と、自己省察の行動の習慣とは連動していると考えられることから、本稿でも大学生の「ケアの倫理」と並んで「自己の内省的思考の習慣」を分析の変数として用いることにしたい。

4-3 従属変数

従属変数は三つである。

第一に、「社会的公正への行動」である。ここでは「社会の不平等を変える行動をしていますか」という質問を用いた。「かなりある」～「全くない」の4段階評価で測定した。

第二に、「公共的関心」を次の質問によって測定した。(1) 選挙でどの党に投票するかについて、(2) 日本と中国との外交について、(3) 将来、ボランティア活動をする事について、(4) 地球温暖化していることについて、(5) 日本で外国人労働者が増えることについて、の5つのそれぞれの項目に対して

「あなたは以下のことに興味がありますか? それぞれに最もあてはまるものをお選びください」という問いを設定し、「興味がある」～「あまり興味がない」という5段階での回答を得た。

第三に、「社会正義志向」である。これはカリフォルニア大学高等教育研究所(HERI)の‘College students’ beliefs and value survey’のうち、2003年に実施された調査票からQ9より一部を使用して訳出した¹²⁾。GPAの代表される学業成績ではなく、広くグローバル社会での他者理解や、批判的思考力などの汎用的な能力を自己評価によって測定した。具体的には、「大学に入学した当初に比べて、現時点でどう思いますか」という問いに対して、「とても強くなった」～「とても弱くなった」という5件法での回答を得た。すでにアメリカにおいて大規模調査でデータと調査項目の信頼性が確保されていること、さらに本稿で紹介する調査が日本の大学の社会科学系学部で実施されたこともあり、社会科学系の学習目標と合致する項目であると判断した。さらに本稿の分析では、アメリカでの調査結果を踏まえ、この10個の項目をさらに四つの次元に分解して変数を作成した。「グローバルシチズンシップの意識(異質な文化や規範を受容できる能力)」、「ローカルシチズンシップの意識(身近な地域や我が国の抱える社会問題を理解する力)」、「ライフスキルの獲得(批判的思考力・リーダーシップ・人間関係調整力)」、「精神的(スピリチュアルな)成長」という四つである。これらを総合したものを大学生の「社会正義志向得点」とした。本稿では「社会正義志向」の中でも特に「グローバルシチズンシップの意識」に着目して分析を行う。

表2 「社会正義志向」の変数と質問項目

社会正義志向	
変数名	質問項目
グローバルシチズンシップの意識	「異質な文化や規範を受容できる能力」
ローカルシチズンシップの意識	「身近な地域や我が国の抱える社会問題を理解する力」
ライフスキルの獲得	「批判的思考力・リーダーシップ・人間関係調整力」
精神的(スピリチュアルな)成長	「宗教性の獲得, 精神的(スピリチュアルな)成長」

5 分析結果

5-1 大学生のケアの倫理の特性

ケアの倫理得点の特性を学年別、性別にみたのが表3である。男女別でみると女子学生の方が男子学生よりもケアの倫理の得点は高い傾向が見られた。しかし、学年別にみると有意な差は見られなかった。1回生と4回生との間の差の検定を行ったが、多重比較の検定でも有意な差は見られなかったことから、学年が上昇することでケアの倫理が自然と上昇する

表3 ケアの倫理の特性

	ケアの倫理得点 (SD)	N	有意水準
男性	49.1(10.6)	128	F = 11.468 (P = .001)
女性	53.7(9.7)	101	
1回生	50.8(10.6)	153	F = .603 (P = .614)
2回生	50.4(11.0)	34	
3回生	52.7(8.5)	34	
4回生	54.1(11.8)	8	
合計	51.1(10.4)	229	

注) 有意水準は一元配置分散分析のF検定による。

という傾向は見られないことが分かった。

5-2 内省的思考の習慣とケアの倫理

次に、大学生の「内省的思考の習慣」とケアの倫理との関係を見てみよう。表4をみてもわかるように、人生の意味や目的の探求行動が強い（内省的思考の習慣のある）学生ほど、ケアの倫理得点が高い傾向が見られる。つまり内省的な行動をとる習慣のある学生は精神的成長が顕著であることを意味する。

5-3 社会正義の行動とケアの倫理

従属変数の一つである「社会的公正への行動」とケアの倫理との関連を見たのが表5である。これを見ると「世の中の不平等を変えようと行動すること」に積極的な学生ほどケアの倫理得点が高い傾向が見られた。社会的公正への行動はケアの倫理の成長度が高いほど積極的であることが推測されるだろう。

5-4 ケアの倫理と公共的関心

次に、従属変数の「公共的関心」とケアの倫理との関連をみたのが表6である。これを見ると、公共

表4 「人生の意味や目的の探求行動」とケアの倫理

「人生の意味や目的の探求行動」とケアの倫理得点		
人生の意味や目的の探求行動	ケアの倫理得点 (SD)	N
全くない	40.7(11.4)	11
あまりない	46.9(9.6)	60
ある程度ある	52.7(8.8)	109
かなりある	55.3(11.6)	47
合計	51.4(10.5)	227

注) F検定による有意水準 P = .000 F = 11.733

表5 不平等を変えようとする行動とケアの倫理

不平等を変えようとする行動とケアの倫理得点		
不平等を変えようとする行動	ケアの倫理得点 (SD)	N
全くない	39.8(9.8)	21
あまりない	48.5(9.2)	110
ある程度ある	55.1(8.4)	75
かなりある	61.9(7.9)	21
合計	51.1(10.5)	227

注) F検定による有意水準 P = .000 F = 29.882

的関心の項目の一つである「選挙でどの党に投票するかについて」とケアの倫理得点との間に有意な関連が見られなかったが、「日本と中国との外交について」、「ボランティア活動をする事について」、「日本で外国人労働者が増えることについて」という項目について、それぞれ関心が高い学生ほどケアの倫理得点が有意に高い傾向が見られた。

次にケアの倫理の構造との関連を検討するために、各項目ごとに、公共的関心との相関係数を表7に示した。これをみてもわかるように、ケアの倫理の中でも、とりわけ【(6) 人類全体の進歩と幸福のために、自分でできることをやってみよう】.389***【(10) いま、ここでの瞬間が大切なひと時だと感じる】.322*** という項目が公共的関心を高める効果がみられた。その次に、【(7) 草花を見ているうちに、大き

な安らぎや喜びを感じたことがある】.283***【(8) 身の回りの自然と自分が心を通わせたと感じた経験がある】.265***【(9) 自分が死んでも、自然の一部になって生き続けることができると思う】.266*** といった、「自然との調和」が高い相関を示した。【(11) 自分のいのちは、形を変えて永遠に存在すると思う】.213** また、【(12) 自分は何か大きな見えない力によって「生かされている」という実感がある】.213** といった、他者からの働きかけに委ねていくように応答する感性も有意な効果が見られた。

5-5 社会正義志向とケアの倫理

では、大学生のケアの倫理と社会正義志向はどのような関連が見られるだろうか？ ケアの倫理得点と社会正義志向の関係をみたのが表8である。社会

表6 公共的関心とケアの倫理得点

選挙でどの党に投票するかについて	ケアの倫理得点 (SD)	N	有意水準
興味がない+あまり興味がない	49.3(10.5)	86	F = 2.119
どちらともいえない	51.2(8.5)	38	P = .113
やや興味がある+興味がある	52.5(10.9)	105	
日本と中国との外交について	ケアの倫理得点 (SD)	N	有意水準
興味がない+あまり興味がない	47.9(10.7)	71	F = 5.241
どちらともいえない	53.1(8.9)	45	P = .006
やや興味がある+興味がある	52.4(10.4)	113	
ボランティア活動をする事について	ケアの倫理得点 (SD)	N	有意水準
興味がない+あまり興味がない	45.6(10.0)	60	F = 14.393
どちらともいえない	51.2(9.8)	60	P = .000
やや興味がある+興味がある	54.1(9.8)	109	
地球温暖化していることについて	ケアの倫理得点 (SD)	N	有意水準
興味がない+あまり興味がない	43.3(10.7)	33	F = 12.339
どちらともいえない	51.3(8.0)	43	P = .000
やや興味がある+興味がある	52.7(10.2)	153	
日本で外国人労働者が増えることについて	ケアの倫理得点 (SD)	N	有意水準
興味がない+あまり興味がない	45.2(11.6)	42	F = 9.285
どちらともいえない	51.1(10.0)	43	P = .000
やや興味がある+興味がある	52.8(9.6)	144	
合計	51.1(10.4)	229	

注) 「あなたは以下のことに興味がありますか？それぞれに最もあてはまるものをお選びください。」という質問に基づく。有意水準は一元配置の分散分析 F検定による。

表7 ケアの倫理項目と公共的関心との相関^{1), 2), 3)}

ケアの倫理項目	「公共的関心」との相関係数
1 他者の普遍的受容	
(1) 自分を愛するように他人を愛することができる	N.S.
(2) 相手が喜び、幸せそうにしているのを見ると、自分のことのように嬉しくなる	.152*
(3) どんな相手でもわけへだてなく受け入れることができる	.140*
(4) 自分の喜び、苦しみや悲しみを周りの人々と一緒に分かち合いたいと思う	.203**
(5) 私たちは、みんなが「目には見えない糸」で結びつきを持っていると思う	.255**
2 自然との調和	
(7) 草花を見ているうちに、大きな安らぎや喜びを感じたことがある	.283***
(8) 身の回りの自然と自分が心を通わせたと感じた経験がある	.265***
(9) 自分が死んでも、自然の一部になって生き続けることができると思う	.266***
3 超越的存在の認識	
(11) 自分のいのちは、形を変えて永遠に存在すると思う	.213**
(12) 自分は何か大きな見えない力によって「生かされている」という実感がある	.213**
(13) 人間を超えた「神」のような存在があると思う	.110+
4 生きる情熱と意味探求	
(6) 人類全体の進歩と幸福のために、自分でできることをやってみたい	.389***
(10) いま、ここでの瞬間が大切なひと時だと感じる	.322***
(14) 自分がこの世に生まれてきたことには、大きな意味があると実感できる	.172**
(15) 一日一日を、一生懸命になって生きているという実感がある	.192**

注1) 有意水準 *** < .001 ** < .01 * < .05 + < .10

注2) N.S. は有意な関連が見られなかった項目を示す。

注3) 0.2以上の有意な相関係数にアンダーラインを引いた

正義志向を「低い」～「高い」の4つのランク別にみると、社会正義志向が高いほど、ケアの倫理得点も有意に高まる傾向がみられた。

社会正義志向変数のうち、例えばグローバルシチズンシップの意識の水準はケアの倫理とどのような関係にあるだろうか？「グローバル公共性」を構成

表8 社会正義志向得点ランク別にみたケアの倫理

社会正義志向得点	ケアの倫理得点 (SD)	N
低い	46.7 (9.8)	57
中下	50.2 (9.3)	59
中上	51.7 (10.4)	64
高い	57.1 (10.0)	46
合計	51.2 (10.5)	226

注) F 検定による有意水準 P = .000 F = 9.649

する質問の一つである「国や民族の異なる人々と共に暮らしていく知恵」について「強くなった+やや強くなった」学生のケアの倫理得点との関連を見たのが表9である。

これをみると、国や民族の異なる人々と共に暮らしていく知恵が「強くなった」と答えた学生は、そうでない学生に比べてケアの倫理得点が有意に高い傾向が見られた。ケアの倫理の高いことは、大学生活でのグローバルな他者理解を促進するものと推測される。

5-6 ケアの倫理の効果検証

次にケアの倫理を4次元に分けて、それぞれの次元の変数と社会的公正行動や社会正義志向との関連

表9 グローバルシチズンシップの意識とケアの倫理得点^{1), 2)}

国や民族の異なる人々と共に暮らしていく知恵 ケアの倫理得点 (SD)	N
強くなった	53.5 (10.1) 98
弱くなった	49.4 (10.5) 128
合計	51.2 (10.5) 226

注1) F検定による有意水準 P = .004 F = 8.611

注2) 「強くなった」は「とても強くなった」「やや強くなった」と回答した者で、「弱くなった」は「変化がない」「やや弱くなった」「とても弱くなった」と回答した者を示す。

をみてみよう。表10は、ケアの倫理変数と社会的公正・社会正義変数との関連（相関係数）である。

表11はケアの倫理の各次元と社会正義志向の相関係数を示したものである。これをみると超越的なものへの認識は、グローバルシチズンシップの意識とは有意な関連がみられない。自然との調和性といった自然観に基づくケアの倫理の方が、超越的なものへの認識よりも社会正義志向の源泉となっているのではないかと推測される。

この相関係数の結果を踏まえ、さらに性別、学年を統制変数とした上で、大学生の社会正義志向に対してケアの倫理が及ぼす影響についての重回帰分析を行った（表12）。

重回帰分析の結果、「社会的公正への行動」（社会正

義の行動を示す不平等を変えようとする行動）に対しては、ケアの倫理の影響が見られた。特に「自然との調和」（ $\beta = .343$ ）と「内省的思考の習慣」（ $\beta = .346$ ）が有意であった。これは学年と性別をコントロールしても有意であった。「グローバルな公正への理解」に対しては、学年が上がるごとに上昇し（ $\beta = .175$ ）、内省的思考習慣のある学生ほど高く（ $\beta = .321$ ）、ケアの倫理の中でも「自然との調和」が有意であった（ $\beta = .200$ ）。超越的存在を認識するケアの倫理は、逆にグローバルな公共性への理解を低める傾向が見られた（ $\beta = -.136$ ）。

表12の結果を要約すると次の三点に集約できるだろう。第一に、ケアの倫理が高い大学生ほど、社会的公正への行動に積極的であり、また公共的関心や、

表10 ケアの倫理変数と社会正義変数との関連（相関係数）

	社会的公正への行動 (N = 227)	公共的関心 (N = 229)	社会正義志向 (N = 226)
他者の普遍的受容	.393***	.237***	.279***
自然との調和	.532***	.346***	.276***
超越的存在の認識	.352***	.227**	.147*
生きる情熱と意味探求	.414***	.352***	.380***

*** < .001 ** < .01 * < .05 + < .10

表11 ケアの倫理と社会正義志向の相関係数

	社会正義志向			
	グローバルシチズンシップ (N = 226)	ローカルシチズンシップ (N = 227)	ライフスキルの獲得 (N = 227)	精神的（スピリチュアルな）成長 (N = 227)
他者の普遍的受容	.175**	.153*	.276***	.237***
自然との調和	.257***	.220**	.131*	.249***
超越的存在の認識	.081	.107	.065	.220**
生きる情熱と意味探求	.236***	.343***	.321***	.266***

有意水準 *** < .001 ** < .01 * < .05 + < .10

表12 ケアの倫理が社会正義の行動と志向に及ぼす効果の重回帰分析

	社会的正義の行動と関心			
	社会的公正への行動 β (t 値)	公共的関心 β (t 値)	社会正義志向 β (t 値)	グローバル公共性 β (t 値)
学年	.017(.316)	-.026(-.422)	.233(3.829)***	.175(2.854)**
性別 (女性)	-.027(-.515)	.001(.019)	.032(.548)	.099(1.602)
ケアの倫理				
他者の普遍的受容	.094(1.424)	-.034(-.433)	.038(.522)	-.035(-.457)
自然との調和	.343(5.107)***	.221(2.793)**	.131(1.772)+	.200(2.581)*
超越的存在の認識	.017(.251)	-.032(-.413)	-.108(-1.469)	-.136(-1.763)+
生きる情熱と意味探究	.077(1.129)	.207(2.569)*	.213(2.825)**	.082(1.032)
内省的思考の習慣	.346(6.076)***	.237(3.531)**	.292(4.673)***	.321(4.895)***
Adjusted R2	.416	.193	.298	.225
F 値	24.03***	8.702***	14.653***	10.338***
N	227	227	226	226

有意水準 *** < .001 ** < .01 * < .05 + < .10

社会正義志向も高まる傾向が見られた。さらにケアの倫理が高い学生ほど、グローバルな他者理解度も関心が高い傾向が見られた。ケアの倫理が高いほど社会的正義の行動と関心が高まる傾向が確認されるといえる。第二に、内省的思考習慣の効果が高いことが確認された。社会的正義の行動と関心のいずれの変数に対しても、内省的思考の習慣は正の効果を示した。第三に、ケアの倫理変数の中でも、とりわけ「自然との調和」志向の高いことが、社会正義の行動と関心にプラスの効果を持っていた¹³⁾。以上の結果を踏まえると、「ケアの倫理」の高い学生ほど、社会的公正への行動や社会正義志向が強いことが判明するのであり、教育においても「ケアの倫理」を涵養することが社会正義志向を高めることが推測できる。「ケアの倫理」教育をカリキュラムに導入することで、単なる就職準備教育ではなく、公共性へと導くための「生き方教育」としてのキャリア教育の可能性が拓かれると言えるだろう。

6 考察—キャリア教育とケアの倫理

本稿では「ケアの倫理」に着目し、ネル・ノディングス、今田高俊らの「他者への配慮」や「他者へ

の貢献」を視野に入れた「ケアの倫理」の概念を採用しながら、その批判的検討を試み、「他者」についてさらに検討を加えた上で「ケアの倫理」の効果を大学生のデータから検証した。その結果、「自己超越的なケア倫理」が大学生の社会正義志向を高めることを確認した。これらの本稿の分析結果を踏まえ、キャリア教育とケアの倫理に関するいくつかの考察を試み、本稿の結びとしたい。

第一に、キャリア教育で伝えるべき「ケアの倫理」とは何か、という点である。「他者へのケア」というときの、「他者とは誰か」という点に関して本稿ではネル・ノディングスおよび今田高俊の定義に一定の修正を加えて、自己超越的な存在としての他者を加えて分析を行った。ここでは社会や他人という人間関係あるいは社会関係資本のみを指すのではなく、自己と他者という人間関係における相互のケア関係を越えて、自己超越的な存在をも「他者」として捉えたのである。この場合の自己超越的な他者とは、自然や宇宙といった人間社会を超えた存在、あるいはスピリチュアリティといった精神性も含まれる。換言すれば自己を超越した全体性（ホリスティック）としての「他者からの・他者へのケア」である。こういった自己超越への認識を含んだ「ケアの倫理」

は、他者をケアする自己の限界を知ることの契機となるものであり、自らの力でキャリアを切り拓く、という自主独立の発想を回避する上でも重要な論点であると考えられる。

第二に、「他者へのケア」というときの「ケア」は「誰が誰に対して行うか」に関する点である。ネル・ノディングス (2007=1992)、今田 (2004, 2017) が想定する「ケア」は自己と他者との相互関係が前提である。つまり支え合いの原理を基本とする点においては、キャリア教育の中に取り言えるべき重要な論点となり得るであろう。しかしそこでの議論の出発点は「自分から他者へのケア」であり、そのことによって自己もケアされるという相互行為によって共生社会が構築されていくことが暗黙裡に想定されている。しかし、本稿ではそう考えない。まず「ケア」という行為は、私がケアを他者 (誰か) に与える、という以前に、「誰かによって」、「すでに」、「無条件に」「ケアされている」という認識が出发点であるということである。例えば、本稿のアンケートでの質問の一つである「自分は何か大きな見えない力によって『生かされている』という実感がある」という意識が、大学生の社会的正義志向や社会的公正への行動と強い相関を示した点は注目すべきだろう。「生かされている」というのは「他者に働きかける以前に」すでに全体的な調和性をもった自然などの超越的存在に「支えられ」「働きかけられている」ということであり、人間とは働きかけてくれる誰かに依存する存在であることの認識が重要だということをも示していると言えるだろう¹⁴⁾。つまり「誰かをケアしなくとも (出来る状態になくとも)」すでに「自分は無条件にケア (愛=大切に) されている」という認識である¹⁵⁾。それはまた「無限の愛情」とでも表現できるものであろう。「誰かを愛 (大切に) する」ためには、すでに「誰からか愛 (大切に) されている」ということが無条件に付与されていない限り、「他者に対するケア」は成立しないというのが「ケア」の本質であるところでは考える。この点は次の第三の論点と密接に関わる。

第三の論点とは、ケアの倫理の行為主体の人間像に関する問題である。他者をケアする能力がある、あるいは他者をケアする立場に立つことのできる状態にある人にとっては、他者へのケアを前提とした「ケアの倫理」は成立する。しかし、他者をケアすることができない、自分のことで精一杯の人 (キャリア教育においては、例えば進路選択に迷った学生) に対しては、「ケアの倫理」をどう伝えていけばよいのだろうか。ここで、筆者は、弱い自己を認めることでしか、他者をケアすることは難しいと考える。そもそも「他者へのケア」を前提とするということは、ある意味では「強い」人間像を所与のものとしていないだろうか。自立した人間として他者をケアすることは可能である。しかし、人間はそれほど強いとは限らない。自立できない弱い立場に立つ可能性がある人間像を所与としない限り、ケアの倫理を教育で伝えていくことは難しい。自立自尊を貫く「強い人間」を前提とした近代の価値は、結果的に「自己責任」の論理に結びつき、共生を目指すケアの倫理とは両立しないのではないだろうか。弱い自分を認め、その上で、他者に依存しても生きていけることを知ることこそ、ケアの倫理の本質であろう。また、一人の人間が自力で他者を完全にケアすることは出来ないことも事実である。この点でも、人間とはもともと「不完全な存在」であることを前提とした「ケアの倫理」が必要であり、他者への依存を必要とする弱い自己を所与としてこそ「ケアの倫理」が可能になると言えないだろうか。支えられているからこそ支えることもできる、自分は弱いからこそ他者に依存することも可能であるという規範の上にケアの倫理がないと、それは自分の (人間としての) 力のみで善を行う自力作善に陥る可能性がある。それこそ、「自律した個人」を前提とする近代の人間像を克服できないのではないだろうか¹⁶⁾。そのような近代的人間像を前提としたケアの倫理のキャリア教育への導入は、単なる自立自尊の道徳を教示するにすぎず、かつて社会学者のマックス・ウェーバー (Max Weber) が強調した初期資本主義の精神、すなわち

自立自尊を重んじ、儉約によってこそ経済が発展したとされるプロテスタンティズムのエートスという、いわば近代の呪縛からは逃れられないのである。これからの教育は、個人をそういった近代の自立自尊の呪縛から解放する必要がある。そしてキャリア教育こそは、他者と競い合い、「強い人間」として厳しい競争社会を生き抜く「武器」としてのスキルを持たせることのみを目的とするのではなく、弱い自分は弱い他者と支え合わないと生きていけないことを、「生き方教育」として伝えていく役割を担うべきではないかと考える。

本稿が主題とするキャリア教育において、「ケアの倫理」を学ぶということは、つまりこういうことである。「自分だけではキャリアを切り開いていけない、不完全な自己であること」、「他者の力を借りて初めて自分の道を切り開いていける弱い存在であること」、そして完全ではない自分は、すでに自己を超えた存在に無条件にケア（愛=大切に）されていること¹⁷⁾、そして、「ケア（愛=大切に）されているからこそ、仕事を通して、他者をケア（愛=大切に）することができるようになること」を知ることである。仕事やキャリアは、そういう無条件の「ケア」が出発点となって可能になるのであり、「ケアの倫理」をキャリア教育で学ぶということは、「大企業」「安定した仕事」「グローバル」「高い収入」「昇進と地位達成」など社会的業績への野心を培うだけではなく、若者が未来のキャリアを切り開いていくための行為のエートス、そして、共生社会へ向かうための「生きる力」の源泉を得ることなのである¹⁸⁾。

7 方法論的課題

最後に、本稿の方法論的課題について述べる。本稿で提示した「精神的（スピリチュアルな）成長」という概念は、オリジナルのHERI調査で表記された「spirituality」を訳したものである（Astin, et al, 2010）。またネル・ノディングス（2007=1992）や今田（2004, 2017）の述べる「ケアの倫理」とは

キャリア教育にとってどう位置づけられるのかについての吟味が本稿においては不十分である点是否めない。さらに、「自己超越性尺度」という心理学の尺度を援用し、質問紙調査を用いた本稿の量的分析では、「ケアの倫理」が十分に測定できているとは言い難い。そもそも「ケアの倫理」という概念そのものが、既存の宗教や素朴な自然観とどう違うのか、さらには、「ケアの倫理」と社会正義志向とはどういう関連性があるのか、といった点についてはさらなる議論が必要だろう¹⁹⁾。

この点は今後の課題として残されるが、教育とデモクラシーについて議論する経済学者の猪木武徳の考察は、この課題を乗り越える上でも示唆に富む。猪木は民主政治にとっても市場経済にとっても、極端を避け、公正かつ円滑に諸制度を運用する上では「公共精神」が大前提となると述べる（猪木, 2019）。市場機構では、人々は利潤動機に突き動かされるため、「利潤追求のためであれば何でもやる」といった事態を招きやすい。そのため、これを回避するのは『「他者」』と『未来』のことに思いを馳せる『公共精神』であり、それはまた「利己主義の檻に閉じ込められた精神を解放する、広い意味での『宗教心』」（猪木, 2019: 147頁）であるという²⁰⁾。ここで猪木の言う「広い意味での宗教心」というのは、もちろん既存の宗教のこののみを指すのではない。それが既存の宗教に依拠した信仰であるか、あるいは素朴な自然観やスピリチュアルな志向であるかは問われないであろう。いずれにしても、労働市場での経済活動、あるいは公的領域での政治活動やボランティア活動といった社会的行為を支えるのは、人間の内的な思考や情動、あるいは精神性であるとすれば、人間の心性ともいうべき「精神性=ケアの倫理」は、教育にとっても重要な要素の一つであるというべきだろう²¹⁾。

もっともこの「ケアの倫理」や「精神性」は、道徳教育や戦前の教育勅語のようなカリキュラムに安易に還元されるものではない。またスピリチュアリティの過剰が狂信を生み出す危険性も孕んでいるの

であり、カルト集団にみられる反社会的行動を扇動する精神性にも、当然のことながら導引されるべきものでもない。キャリア教育にとって「ケアの倫理」あるいは「精神性 (スピリチュアリティ)」とはいったい何であるのか、教育はどこまでそういった側面に関わるべきなのかについては慎重な議論が必要である。

付記) 本研究の一部は科研費 (挑戦的研究 (萌芽)) 「高等教育におけるキャリア教育と社会正義に関する研究 (2019-2021年度)」 (研究代表 前田信彦) (19K21798) を用いて実施された。

注

- 1) 「スピリチュアル」の「spirit」は、本来、神と人間をつなぐ魂の絆という意味からも「霊性」という言葉が一番近いが、「霊性」というと「幽霊」などの科学的に立証できない現象を含めたイメージになるため、医学分野においても慎重にならざるを得ないという (田崎, 松田, 中根, 2002)。定義や表記については更なる議論が必要と思われるが、本稿では「スピリチュアリティ」「精神性」「霊性」を同義として表記することにする。
- 2) 本稿は筆者のこれまでのキャリア研究 (前田, 2009, 2010, 2015a, 2015b, 2017, 2020) の延長線上にあり、新たに「ケアの倫理」という二つの要素を取り入れた試みである。用いるデータ特性の制約からも探索的研究 (exploratory data analysis) として位置づけられる。
- 3) ただしナンシー・アーサーのいうキャリアガイダンス (キャリア支援) における社会正義の実現は、そこに関わる実務家にとっての社会正義の実現を意味している (ナンシー・アーサー, 2016) のであり、学生などのクライアントの側の社会正義や社会的公正への関わりについて述べているわけではない。しかし、キャリア教育と社会正義という観点から見ると、実践家や教育者の側の社会的正義へのコミットメントのみならず、クライアントあるいは受講生である学生が社会的公正や社会正義の実現のための一歩を踏み出し、自らのキャリアを形成するというクライアント (学生) の社会正義へのコミットメントを評価することも重要であろう。本稿は、キャリア教育を受講する受け手としての学生が、社会正義や社会的公正に向けた意識の涵養や公共的な活動を評価することによって、社会正義の要素を取り入れたキャリア教育の可能性を探る。
- 4) ハンセンの議論はキャリアカウンセリングに関するものであるが、「キャリア発達」を念頭にした学生へのキャリア教育・支援にも共通する論点であり、キャリア教育を論じる本稿においても参考になるだろう。なお、ハンセンのキャリア理論の概要については渡辺 (2007) 159-171頁を参照。
- 5) 森 (2004) は、早くからキャリアカウンセリングやキャリア発達におけるスピリチュアリティの重要性を指摘しており、2004年に行われた全米キャリア開発協会世界大会におけるハンセンの講演を紹介している。そこではハンセン自身が講演の中で spirituality を「本能」、「直観」、「自己超越」によって知ることができると説明したことを紹介した上で、「精神性」よりも「霊性」の方が適当な訳語であると述べている (森, 2004: 168頁)。本稿でも森 (2004) の訳語に従い、spirituality を「精神性」もしくは「霊性」と訳す。
- 6) 「Equanimity」の変数に関する質問は次の5つの項目で測定されている。
 - ① (あなたは) 自分が困難な状況にあっても (人生の／生きることの) 意味 (meaning) を見いだすことができますか?
 - ② 平和であることを感じますか?
(以上は、「しばしばある」「時々ある」「全くない」という3件法の回答)
 - ③ 私がこれから歩む道はよい方向に向かうだろうと感じる
 - ④ 私は毎日が良かろうと悪かろうと、すべて贈り物と思っている
 - ⑤ 私は自分自身に起こったすべての出来事に対して感謝している。
(以上は、「とてもそう思う」「ある程度そう思う」「全くそう思わない」までの3件法の回答)。以上の5項目の得点を加算して3~15点までの尺度を作成し、Equanimity の水準を測定したものが Equanimity 尺度である (Astin, A, et. al, 2010)。

- 7) 本稿の焦点となる、スピリチュアリティと社会的公正の観点から、この大学生のスピリチュアリティ調査のデータを再分析したのが Brandenberger and Bowman (2013) である。ここでは、やはり「ケアの倫理」, 「ボランティア・慈善活動, 共感尺度」に対して、スピリチュアリティが有意な効果を持っていたことが確認されている。同様に Chenot and Kim (2013) においても、社会正義志向 (social justice orientation) とスピリチュアリティとの間に有意な関連が見られたことが報告されている。
- 8) Astin, et. al (2010 : 65頁) においては、ネル・ノディングスの著書について複数を参照しているが、ここでは本稿に最も関連すると思われるネル・ノディングス (1992=2007邦訳) を参考文献として記載する。
- 9) ネル・ノディングスはシモースヴェイユの言葉を引用しながら、「ヴェイユは注意深さを、隣人愛の中心に据えた。それこそが、他者に対して (直接的あるいは間接的に)『どんな苦難を経験しているのですか』と尋ねるときの、私たちの意識状態である」と述べる (Noddings, N, 1992 : 邦訳 (2007) : 43頁)
- 10) 今田 (2001:262頁) の「他者」の概念の一部は、広井 (2000) に依っている。しかし、広井 (2000) はケアの対象としての「他者」の中に、「自然」をも含んでおり、社会関係を越えた広範囲の他者性を想定している。
- 11) アンケート調査は、人を対象とする調査に関する研究倫理規定に沿って、利益相反、プライバシー情報の保護など学生に事前に説明を行い了解を得た上で実施した。
- 12) 社会正義志向に関する分析は前田 (2020) で行っているため、それを参照。
- 13) 日本人の自然観や死生観に特徴的な精神性が高いほど、社会正義の行動と関心が高い傾向がみられた点には注目すべきだろう。つまり日本の大学生は、自然に触れるという感覚がケアの倫理の一つであり、それが活動のエネルギーの源泉となっているのではないだろうか。このような日本の大学生のケアの倫理が、欧米におけるケアの倫理や自然観とどう異なるのかについては、このデータの
- みでは明瞭ではない。今後、検討する価値のある仮説である。
- 14) 金井壽宏は社会学でも頻繁に使われる「エージェンシー (agency)」という用語について、「the agency of Province = 神の力・摂理」という意味になることを述べている (金井, 2006)。キャリア発達が自己の主体性と同時に、超越的な力によって導かれるということを示唆している。
- 15) ネル・ノディングスの用いる「専心 (engrossment)」という言葉は、日本人にはやや理解が難しいように筆者は感じる。「支援」あるいは「支える」「配慮する」といったケアの本質を意味する言葉であるが、日本語では「寄り添う」といった言葉の方が馴染みやすいのではないだろうか。こういった「他者へのケア」を表現する言葉としては、例えば、聖書の言葉に「愛する」という訳語がある。しかし、やはりそれも日本語では本質的な理解が難しい言葉である。実際、もともと聖書の「愛」という言葉は、日本語では「ご大切」と訳されてきたことに注目されたい。
- 16) この点については、土居 (1992) の中の「信仰と甘え」(200-220頁) を参照。『甘えの構造』において日本人の精神性を描き出した土居健郎によれば、日本では、ドイツ語の文法上で頻繁に使われる「Du」(ドゥ) カテゴリーが弱く、「Es」(エス) カテゴリーの表現が多いことに気づいたドイツ人宣教師のホイヴェルス神父の言葉を引用しながら、日本においてはキリスト教での「創造する神」には関心が弱いと言われるが、一方で、信仰の対象が「宇宙の調和」や「優しい全体的調和」として特徴づけられるとしている。この点を見ても、日本人もすでに十分に「ケアの倫理」の要素を持ち合わせていると考えられる (戸川・土居, 1986 : 70頁)。
- 17) ここではネル・ノディングスの言う「身近な他者」を超えた自然などを含む。例えば「自然 (nature)」というのは、古来、日本において超越した他者であり、近年は環境への配慮 (ケア) という意味での「エコスピリチュアリティ」と密接に関連する。なお、自然との調和を志向する霊性は「エコスピリチュアリティ (中川, 1996)」という概念と共通するものがあるが、この点について

は本稿の域を超えており、別の機会に論じることにしたい。

- 18) この点についてはかつて上智大学学長をつとめたイエズス会・カトリック司祭のホイヴェルス神父の言葉、「Erziehung (教育) とは、暗いところから光の方に案内することです」から示唆を得た(戸川・土居, 1986: 146頁)。
- 19) 学生のケアの倫理はどのように育まれるかについては、より大規模なデータを用いた詳細な分析によって検証していく必要があるだろう。すでに前稿(前田, 2020)において、大学生のライフキャリア教育の実践を通して、内省的な知の獲得やスピリチュアルな成長が見られることをデータによって明らかにしたが、加藤(2016)(2020)でも指摘されているように、大学入学前からスピリチュアルな成長は始まっている可能性は大きい。そういった多感な中学・高校時代から大学にかけての思春期・青春期に、「ケアの倫理」がどのように獲得されていくのか、そして教育はそれに対してどういった影響を及ぼすのかについての実証的な研究が必要になるだろう。
- 20) 同様に猪木(2009)は、日本は福沢諭吉の『文明論之概略』を引用しつつ、日本では「物の理を究めてこれに応じる働き、つまり学校の成績で測れるような知恵(私智)が優先されやすい」という。「私智」と対照的なのが人事の軽重大小を分別し、何を優先すべきかを、時と場所とを察しつつ判断する働き、すなわち「公智」であるが、日本では、私智や私徳が重視されすぎるという傾向がある(猪木, 2009: 90-91)。
- 21) この点については、倫理=エシックスと公共性の観点から「公共善(common good)」について議論する山脇(2006)を参照。

参考文献

- Astin, A. et. al., 2010 *Cultivating the Spirit: How College Can Enhance Students' Inner Lives*, Jossey-Bass.
- Brandenberger, J., Bowman, N., 2013 'Reciprocal influences of spirituality, religious commitment, and prosocial development during college' Rockenbach, A, Mayhew. M. (eds.), *Spirituality in college students' lives: translating research into practice*. Routledge. 121-137.
- ブライアン・ディック 2016 「キャリア発達における天職・精神性・信仰」『キャリア形成支援の国際的な理論動向の紹介—IAEVG 国際キャリア教育学会日本大会基調講演及びアジアシンポジウムより』(労働政策研究・研修機構) 48-60頁
- Chenot, D, Kim, H., 2013 'Development among adolescents and young adults: Longitudinal linkages between spirituality, religion, and social justice. Rockenbach, A, Mayhew. M. (eds.), *Spirituality in college students' lives: translating research into practice*. Routledge. 138-152.
- 土居健郎 1992 『信仰と甘え(増補版)』春秋社
- Hansen, 2001., *Integrating work, family, and community through holistic life planning*. *The Career Development Quarterly* 49: 261-274.
- 広井良典 2000 『ケア学—越境するケアへ(シリーズケアをひらく)』医学書院
- 今田高俊 2001 「公共性の脱構築—ケアと支援の社会編成(第5章)」『意味の文明学序説—その先の近代』東京大学出版会, 253-327頁
- 今田高俊 2004 「福祉国家とケアの倫理—正義の彼方へ」塩野谷祐一・鈴木興太郎・後藤玲子編著『福祉の公共哲学』235-261頁
- 今田高俊 2017 「個人化のもとで共同体はいかにして可能か」『学術の動向』36-41頁
- 猪木武徳 2009 『大学の反省』NTT出版
- 猪木武徳 2019 『デモクラシーの宿命—歴史に何を学ぶのか』中央公論新社
- 金井壽宏 2006 「活私開公型のキャリア発達とリーダーシップ開発」山脇直司・金泰昌編『公共哲学—組織・経営から考える公共性』261-301頁
- 加藤美紀 2016 「カトリック学校の女子高校生の生きる意味に関する実態調査」『人間の発達: 仙台白百合女子大学人間発達研究センター紀要』第11号 49-58頁
- 加藤美紀 2020 『〈生きる意味〉の教育—スピリチュアリティを育むカトリック学校』教友社
- 前田信彦 2009 「大学から職業キャリアへの移行と学習過程・学生生活—学部4年生における『潜在的無業層』の分析」『立命館高等教育研究』9,

- 141-158頁
- 前田信彦 2010 『仕事と生活—労働社会の変容』ミネルヴァ書房
- 前田信彦 2015a 「大学生の学習成果・職業能力と初職達成の分析—学術知と経験知の効果—」『立命館産業社会学論集』50/4, 189-206頁
- 前田信彦 2015b 「Career Decidedness of University Graduates and their Effect on Initial Job Attainment」International Association for Educational and Vocational guidance (IAEVG), Tsukuba, Japan 2015年9月
- 前田信彦 2017 「中高年キャリアにおける成人力と公共的関与—キャリアと公共性に関する試論—」『立命館産業社会学論集』53/3, 27-42頁
- 前田信彦 2020 「大学におけるキャリア教育と社会正義—社会科学系学部の学生データを用いた探索的分析」『立命館産業社会学論集』(近刊)
- 森久子 2004 「キャリア・カウンセリングにおける spirituality の概念をめぐって—全米キャリア開発協会国際大会での議論の理論的総括に即して—」『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』No.5 167-174頁
- 中川吉晴 1996 「ホリスティック教育とスピリチュアリティ」『立命館大学教育科学研究』7号, 51-69頁
- 中村雅彦 1998 「自己超越と心理的幸福感に関する研究—自己超越傾向尺度作成の試み」『愛媛大学教育学部紀要』vol.45 no.1: 59-79頁
- ナンシー・アーサー 2016 「文化に基づいたキャリアカウンセリングと社会正義のアドボカシー (提唱と実践)」『キャリア形成支援の国際的な理論動向の紹介—IAEVG 国際キャリア教育学会日本大会基調講演及びアジアシンポジウムより』(労働政策研究・研修機構) 5-20頁
- ネル・ノディングス (Nel, Noddings), 1997 『ケアリング—倫理と道徳の教育—女性の観点から』晃洋書房 (佐藤学監訳) (Caring: A Feminine Approach to Ethics and Moral Education, Univ of California Press; 2nd, 1984)
- ネル・ノディングス (Nel, Noddings), 2007 『学校におけるケアの挑戦—もう一つの教育を求めて』(佐藤学監訳), ゆみる出版 (The challenge to care in schools; An alternative approach to education, Teachers college press, Columbia University, 1992)
- 日本キャリア教育学会 2008 『キャリア教育概説』東洋館出版社
- 労働政策研究・研修機構, 2016 『キャリア形成支援の国際的な理論動向の紹介—IAEVG 国際キャリア教育学会日本大会基調講演及びアジアシンポジウムより』
- 下村英雄 2016 「解説: 社会正義の実践と課題—ナンシー・アーサー氏の講演より」『キャリア形成支援の国際的な理論動向の紹介—IAEVG 国際キャリア教育学会日本大会基調講演及びアジアシンポジウムより』21-27頁
- 山崎美弥子・松田正巳・中根充文 2002 「日本人にとって“スピリチュアル”とは何か—WHO 質的調査から考える」『看護学雑誌』66巻2号 172-178頁
- 戸川敬一・土居健郎 1986 『ホイヴェルス神父のことば』弘文堂
- 山脇直司 2006 「活私開公のエシックス」『公共哲学—組織・経営から考える公共性』303-315頁
- 渡辺三枝子 2007 『新版 キャリアの心理学—キャリア支援への発達論的アプローチ』ナカニシヤ出版

Appendix 1

スピリチュアリティは中村（1998）を参考に以下のように測定した。

Q5.（素直に考えてみて） 次のような経験や気持ち、考えを、どのくらいお持ちですか？
それぞれ最もあてはまるものをお選びください。

1 他者の普遍的受容

- (1) 自分を愛するように他人を愛することができる 72.1
- (2) 相手が喜び、幸せそうにしているのをみると、自分のことのように嬉しくなる 85.2
- (3) どんな相手でもわけへだてなく受け入れることができる 60.3
- (4) 自分の喜び、苦しみや悲しみを周りの人々と一緒に分かち合いたいと思う 74.7
- (5) 私たちは、みんなが「目には見えない糸」で結びつきを持っていると思う 45.0

2 自然との調和

- (7) 草花を見ているうちに、大きな安らぎや喜びを感じたことがある 54.1
- (8) 身の回りの自然と自分が心を通わせたと感じた経験がある 37.6
- (9) 自分が死んでも、自然の一部になって生き続けることができると思う 19.2

3 超越的存在の認識

- (11) 自分のいのちは、形を変えて永遠に存在すると思う 31.0
- (12) 自分は何か大きな見えない力によって「生かされている」という実感がある 45.4
- (13) 人間を超えた「神」のような存在があると思う 36.2

4 生きる情熱と意味探求

- (6) 人類全体の進歩と幸福のために、自分でできることをやってみたい 62.4
 - (10) いま、ここでの瞬間が大切なひと時だと感じる 75.1
 - (14) 自分がこの世に生まれてきたことには、大きな意味があると実感できる 49.3
 - (15) 一日一日を、一生懸命になって生きているという実感がある 53.3
-

注) 右端の数字は「そう思う」と「ややそう思う」と答えた割合(%)を示す

Career Education and ‘Ethics of Care’ for College Students: Exploration of Life-Career Program and New Direction for Career Education

MAEDA Nobuhikoⁱ

Abstract : In traditional career education, programs have been set up to enable acquisition of the skills necessary for employment in the labour market. They do not include elements providing philosophical insight, such as "how to live well". With this background in mind, this paper has three purposes. Firstly, I consider the ‘ethics of care’ represented by the concept of ‘caring’ that is important for career education. Secondly, I conduct an exploratory analysis of the effects of study of the ethics of care on the social justice orientation of university students. Thirdly, I explore the direction of career education that incorporates ‘ethics of care’.

Keywords : career education, caring, ethics of care, higher education

ⁱ Professor, College of Social Sciences, Ritsumeikan University

